

# 昭和初期における「温泉観光地」の社会史

## － 鹿児島・「垂水温泉」の誕生とメディア・イベント －

井手 弘 人

A Social History of the “Tourist Resort of Hot-springs” in 1930s :  
Concerning the Relationship between the Nascence of Tarumizu  
Hot-spring Area and Media Events in Kagoshima

Hiroto IDE

はじめに - 地域に残る「言い伝え」の現在・未来，そして過去

全国各地には様々な「言い伝え」が存在する。平家落人の伝説が点在するのはその典型例であろうし、大名その他かつての権威者との関係で、正当性や価値を説明するときにも「言い伝え」はしばしば登場する。近年では地域活性化の波に乗って、「かつて、ここはであった」という「言い伝え」がまちおこしのきっかけやスローガンに採用されたりすることもある。こうした動きは、過去の事実を象徴化し、アイデンティティとして明示することによる「共有空間」(アリーナ)の創生を企図している現象かもしれない。

本稿は「言い伝え」の事実が成立する過程について、歴史社会学的、社会史的視点から鹿児島・垂水(海潟)温泉を事例に考察する。ここは現在、二軒の温泉が存在し商店も少なく静かな所である。地域の人は「かつて海潟温泉は霧島・指宿と並び称される温泉郷であった」と言い、在住の高齢者も温泉地区のかつての賑わいについてよく言及し、この「言い伝え」に基づいて、その頃を知らない世代も参加した「海潟温泉再生会」という若手地域活性化グループが誕生し、活動を展開しているほどである。こうした動きからみるとすくなくとも、この地域にある「言い伝え」は地域の現在と未来を支える「記憶」であると言える。ところが、「再生」という言葉は過去の何らかの事実を前提にしたものであり、したがってそこに歴史性が問われるのであるが、「再生」すべきとされる時代の記憶や記録が少なく、漠然としている。たしかに、(表1)にあるとおり、垂水(海潟)温泉は、その開湯からわずか数年で、鹿児島県下屈指の温泉客が訪れる場所になっている事実があるけれども、それだけで現在の静寂さから想像もつかない「霧島・指宿と並び称される」という「言い伝え」についての説明はつかない。その「言い伝え」がなぜ、どのように生まれたのかについて分析し、「再生」が定義する歴史性の所在について検討し、地域の現在と未来に影響を与えている「過去」の姿について明らかにする一つの素材としたい。

本稿ではとくに「メディア・イベント」に着目する。これは主として国家あるいはマス・メディアが企画する「大衆動員」としての視点から分析されることが多い。しかし、それは「大きいもの」が社会を操作統制する手段とするためのものとは限らず、本来「受け手」である立場からメディア・イベントを見ると、一方的に操作統制「されている」だけでは

表1：昭和初期鹿児島県内各地主な温泉の入浴客数

温泉名	所在地(当時)	昭和4(1929)年版	昭和8(1933)年版
鹿児島	鹿児島市下荒田町	-	300000
天保山	鹿児島市下荒田町	-	300000
日当山	始良郡日当山村	50000	200000~300000
伊作	日置郡伊作町	200000	234200
入来	薩摩郡入来村	200000	200000
樋脇(市比野)	薩摩郡樋脇村	17700	146300
垂水	肝属郡垂水町	-	130000
阿久根	出水郡阿久根町	100300	103000
指宿	指宿郡指宿村	摺ヶ浜:48000 濁口:47000	摺ヶ浜:41000 濁口:47000
宮之城	薩摩郡宮之城町	50000	60000
柴立	指宿郡指宿村	55000	55000
諏訪	薩摩郡入来村	50000	50000
霧島	始良郡牧園村	栄之尾:6200 硫黄谷:12000 明礬:11629	栄之尾:6200 硫黄谷:12000 明礬:16000 林田:10000
河頭	鹿児島郡伊敷村	40000	50000
蘭牟田(砂石)	薩摩郡蘭牟田村	30005	35000
高城	薩摩郡高城村	34788	34788
市来	日置郡東市来村	50000	30000

(鹿児島県温泉協会, 1929, 1933より筆者作成)

ない可能性もあり得る。本稿では、本来マス・メディアの情報の「受け手」側にあると考えられる側が、マス・メディアを活用しながら、情報発信とともに自らの利益を獲得する「広報戦略」としてのメディア・イベントという視点から、考察を加えることとしたい。

## 1. 観光の大衆化・国際化 - 1930年代の日本と鹿児島

### (1) 「官」主導の観光戦略 - 鉄道省の動向

さて、昭和初期(1930年前後)の観光について全国的な動向を見ると、官営鉄道を主軸として大きく「大衆化」「国際化」へとシフトしていた時期であると言えるだろう。1920(大正9)年5月15日、鉄道省官制が公布された。これによると、鉄道省には6つの局(監督局・運輸局・建設局・工務局・工作局・経理局)が設置された(第4条)が、なかでも運輸局に関しては「国有鉄道ノ運輸及其ノ附帯ノ業務ニ関スル事項」(第6条1)とあり<sup>1)</sup>、単なる省営鉄道の運行業務に限らず、鉄道沿線に関連する様々な「附帯ノ業務」を展開していった。関戸(2007)は、鉄道省の前身である鉄道院も含め、省営鉄道沿線を中心とした観光旅行案内書を編纂している点に焦点をあて、なかでも鉄道省昇格直前の鉄道院が1920年3月に発行して以後、改定を重ねながら発行し続けた『温泉案内』が「短期間で多くの版を重ねていることから、その人気ぶりが推察される」と鉄道省を中心に「温泉」をテーマとした旅行の大衆化が図られたことを指摘している(関戸, 2007, p.26-27)。

1930年代の日本の観光政策にとってのもうひとつ大きな潮流は、外国人観光客の積極的誘致の動きに乗り出したことである。1930年4月23日、鉄道省に「国際観光局」が設置<sup>2)</sup>され、その後同年7月2日、諮問機関として「国際観光委員会」も設置<sup>3)</sup>された。同委員

1) 『官報』(号外)大正9年5月15日付, p.3

2) 『官報』(第993号)昭和5年4月24日付, p.1

3) 『官報』(第1052号)昭和5年7月3日付, p.1

会第1回会議の冒頭、委員会の会長である江木翼鉄道大臣は以下のような発言をしている。

…、申上げマス迄モナク外客ヲ誘致致シマスルコトハ、国際間ノ親善ヲ益々厚ク致シ、延イテ八国際ノ平和ヲ助長致シマス上ニ於キマシテモ、亦国際貸借ノ関係ヲ有利ナラシメ国民経済ヲ豊ニ致シマスル上ニ於キマシテモ、極メテ重要ナ意義ヲ有スルモノデアリマス、欧羅巴諸国殊ニ仏蘭西、瑞西、伊太利ニ於キマシテハ夙ニ外客誘致ニ付テ深甚ナル注意ヲ払ツテ居リマシテ、諸般ノ設備モ相当ニ充實サレテ居ルノデアリマス、而シテ大戦後ニ於キマシテハ是等ノ国ノ外ニ独逸、英吉利等の諸国ニ於キマシテモ、戦後経営ノ一策ト致シマシテ非常ニ此ノ「ツーリスト、インダストリー」ト云フモノニカヲ注イデ著々実効ヲ収メツツアルノデアリマス、…（中略）…、又我が国有鉄道ノ如キハ外客ノ誘致ト其ノ業務トガ密接ナル関係ヲ持ツテ居ルノデアリマスカラ、以前カラ既ニ之ニ関スル努力ヲ致シマシテ殊ニ明治四十五年ニハ自ら中心トナリマシテ「ジャパン・ツーリスト・ビューロー」ト云フモノヲ設置致シ、専ラ外客誘致ヲ目的トスル機関ト致シマシタコトハ御承知ノ通りデゴザイマス。…<sup>4)</sup>

先述の『温泉案内』（昭和2年版）は、日本旅行協会が翻刻・発行者となっているが、この団体は後にジャパン・ツーリスト・ビューローと合併し、1934年に「ジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本旅行協会）」と名称併記される形に変更がなされた。1930年代は、鉄道省を中心に、観光政策の組織化が急速に推進される時期であるが、それは「国際化」への対応をひとつの契機として、官設機関である国際観光局（行政機関）・国際観光委員会（諮問機関）、半官半民機関であるジャパン・ツーリスト・ビューロー（旅行斡旋）及び1931年12月に鉄道大臣の寄付行為により別置された「財団法人国際観光協会（旅行宣伝）」という分業体制（砂本（1998）、p.188）の確立として結実していった。当然のことながら、誘致のためのコンテンツである「観光地」の選定や開発が行われていった。

鉄道省が国内観光客を獲得し、旅行の大衆化に向けて行っていた温泉案内などの観光地案内編纂の実績は、こうした国際化にも活用されていく。

## （2）「官」からの霧島、「官」に移行する指宿

では、「官」による観光地選定において、鹿児島はどのように扱われていたのだろうか。現在、鹿児島の温泉観光地として全国的にも著名である霧島と指宿を事例に、確認してみることにする。

霧島温泉は、鉄道による旅行に関して全国のモデルコースを網羅した本、『旅程と費用概算』（昭和3年版）では「長崎 鹿児島・霧島・球磨川・唐津廻遊」（7日間）の第3日目宿泊地及び第4日目の起点として記されている（ジャパン・ツーリスト・ビューロー編、1928、p.430-431）。また、同書昭和5年度版では、霧島温泉は門司基点の「九州一周旅程」（10日間）の第7日到着点及び第8日始発点として記載されている。（ジャパン・ツーリスト・ビューロー編、1930、p.496-497）。

対照的に指宿温泉は、1930年代初頭にはこうした資料に名前があまり登場していない。しかし同書昭和9年版に、モデルコースには登場しないものの鹿児島市の紹介に併記される形で紹介が登場されている。ここには「指宿線終点五位野駅から三三軒、自動車一時間半、九〇銭、（鹿児島からと同じ）（九年一月頃に一二軒先の喜入駅迄、九年八月頃迄に指

4) 国際観光委員会『昭和五年七月 第壹回国際観光委員会議事録』p.8-10

宿迄鉄道全通の予定である )」( ジャパン・ツーリスト・ビューロー編, 1934, p.583 ) とされていることから, 省営鉄道沿線に組み込まれることに伴い, 指宿も次第に「上から」の温泉観光地へととなっていくのである。

こうして, 霧島や指宿は, 鉄道省が牽引する「温泉観光地」メインストリームへの階段を徐々にかけて上がっていく。しかし, (表1)にある温泉のうち, 垂水温泉より上位の入浴客数となっているところは, 全て鉄道(省営・私鉄・市営電車)沿線に近く, 駅・停留所からの比較的容易なアクセスが可能な場所である。しかし垂水温泉はそういった条件に適合しない。にもかかわらずこれだけの集客が可能となった背景には何があるのだろうか。

## 2. 「新興」垂水(海潟)温泉<sup>5)</sup>の誕生と「宣伝戦」- 「海」からのアプローチ

### (1) 垂水(海潟)温泉の誕生

現在「海潟温泉」と通称されている鹿児島県垂水市海潟にある温泉場地区は, 昭和初期の文献には「垂水温泉」という名で登場する。『鹿児島県温泉誌』には「昭和五年始メテ発見セラレタル肝属郡ニ於ケル唯一ノ温泉ニシテ...」(鹿児島県警察部衛生課, 1939, p.179)とあり, 『鹿児島県温泉案内』にも「本泉は垂水町海潟にあり, 昭和五年全所上之原熊太郎氏の発見せしもので目下完成したるもの六ヶ所掘鑿中のもの一ヶ所あり, 泉質各々異なる」とあるように, 昭和5(1930)年に誕生したことになっている。

郷土史によれば, 古くから海岸に温泉が湧出していたといわれ, 江戸時代の終わりに垂水島津氏が村の役人に命じて温泉掘削を行ったり, 明治初めには公費で温泉掘りを行うなどしていたがいずれも失敗していたとされている(中島信夫, 2004, p.130)。しかしながら後の垂水(海潟)温泉の場所に近い飛岡海岸に一ヶ所自然に温度の低い温泉が湧出し, 切り石で囲いをして湯場として使っており, 明治30年代からは垂水村上町出身の猪俣イワが井戸にしたうえで温泉水を汲み上げて釜でわかし, 湯場として再建して維持し, その後所有者が代わりながらも猪俣は湯沸かしの手伝いを継続していたという(垂水市立協和小学校創立百周年記念実行委員会, 1978, p.50)。実際大正11(1922)年発行の『垂水村勢要覧』には飛岡川付近に温泉を示す印が記載されており, 地元ではすでに湯場としての認識はあったことがわかる(図1, 垂水村役場, 1922)。昭和6(1931)年7月の新聞記事で, 森山垂水警察署長(温泉協会支部代表)が「...垂水温泉は採掘されて僅かに一年で未だ永遠の事業の基礎工事も出来てゐません。...」と述べていることを考慮すれば, 昭和5年とは, 複数の高温の温泉掘削に成功し, 「温泉場」として組織化された時期を指すと考えるのが妥当だろう<sup>6)</sup>。

5) 現在は「海潟(かいがた)温泉」という名前が一般的であるが, 当時は「垂水温泉」としていたことから, 本稿では, 当時文献等で使われている場合については「垂水温泉」とし, それ以外については「垂水(海潟)温泉」と表記する。

6) 前出の『協和小学校創立百周年記念誌』には, 猪俣イワの井戸の経営権をもっていた上之原熊太郎が昭和4(1929)年6月24日, 飛岡出身の井之上助右衛門・栄兄弟が昭和5年6月, 海潟出身の川畑直吉と熊本・本渡出身の野島長四郎が昭和7(1932)年10月, 垂水町本町出身の川畑銀蔵(坂元戸助に経営委託)も同じく昭和7年に, 同じ頃垂水町後馬場出身の奥亀一(永田佐平に経営委託)がそれぞれ採掘成功した, とある(p.57-58)。ただし, 当時鹿児島県会議員で県農会副会長であった奥亀一は昭和6年6月に急逝していることから, 採掘成功時は後の垂水町長, 戦後垂水市長にもなる息子の奥誓二である可能性もある。



図1 『垂水村勢要覧』にある温泉の印  
(大正11(1922)年)

(2) 昭和6年：鹿児島新聞の「メディア・イベント」と垂水(海潟)温泉  
先述したように、垂水(海潟)温泉は鉄道沿線に存在せず、鉄道省やジャパン・ツーリスト・ビューローが発行する案内誌にも登場していない温泉地である。しかし(表1)をみると、入浴客は霧島温泉の約3倍、指宿温泉の約1.5倍にも達している。その理由を考えるには、昭和6年頃から本格化する、鹿児島新聞(現：南日本新聞)による温泉をターゲットにした「メディア・イベント」との関係を考える必要があるだろう。

昭和5年12月、鹿児島商工会議所は急きょ全国規模の大きなイベントを開催することにした。それが「国産振興博覧会」(昭和6年4月1日～5月15日)である。趣意書の冒頭に「今や我国の経済界は極度の不況に陥り、各種の産業萎縮して民心消沈し、失業者続出して国運の前途、深憂に耐へざるものあり、一度び其の方途を誤らば終に世界的経済戦に敗れて、一層不況の深刻化せんことを慮る。宜く国民協力して民心を振起し、産業の発達、文化の興隆に努め、国力充実の一途に邁進せざる可らず。」(鹿児島商工会議所編, 1933, p.2)とあるとおり、このイベント自体は「或る大事業の完成を記念するとか、又は何かの祝祭典を挙ぐるとか云うやうなことの為に計画せられたものでな」かった(前掲書, p.1)。とくに鹿児島県の場合、県下各銀行の総預金高の半額以上を占め、「名実共に鹿児島財界の王者としてその信用は絶対的と言って良く、前記預金額の内には県市其他の公金及準公金と称すべきもの300万円以上を含んでい」た十五銀行が1927年の世界恐慌の際休業したため、「特に鹿児島に取りては全く死活の問題」となった経緯があった(鹿児島商工会議所, 1943, p.279)。こうした状況を打開する目的で、この博覧会は短期間で企画され、実施に移っていった。

「国産奨励博覧会」に対し、鹿児島新聞は準備段階から詳細に報道していたほか、会場内への無料休憩所特設やイベント、さらには当時まだラジオの放送局も開局していない鹿児島でラジオ放送を毎日行うなど積極的に協力し、主催者側は当時もう一つの県紙であった鹿児島朝日新聞とともに「多大な犠牲的援助を与へられた」と讃えられている(鹿児島商工会議所編, 1933, p.147)。昭和6年2月15日付『鹿児島新聞』には、「温泉郷宣伝に温泉館を設立」として、県温泉協会支部長副支部長会議が、県庁で温泉に関する監督を行う山口衛生課長、宮川技師も参加して開催されたと、以下のような記事を掲載している。

「...協議の結果、経費二千元を投じて開期中博覧会場に一大温泉館を設置し、会場内に県下温泉鳥瞰模型を出品し、温泉案内場を設置し或は温泉土産の販売をなし、その他博覧会期間中支部主催にて温泉入浴団募集の件等を申合せ更に来る廿四日臨時総会を開き最後の決定をなすことになった。...」<sup>7)</sup>

7) 『鹿児島新聞』1931年2月15日付, 6面

(表2)のとおり、温泉館建設にあたっての分担拠出金も決定したことが記事で報じられた。「温泉館」建設は、鹿児島県庁・鹿児島県温泉協会による広域的な「組織化」を推進するうえでも大きな意味をもっていたといえることができるだろう。

(表2) 国産振興博覧会「温泉館」建設に伴う拠出金分担内訳<sup>8)</sup>

拠出金	600円	500円	150円	100円	50円	30円
温泉名	霧島 (安楽含む)	指宿	日当山, 市来	市比野, 伊作, 鹿児島	阿久根, 湯之尾	高城, 出水, 宮之城, 垂水

また、同紙は昭和6年7月4日付一面で、鹿児島県下各地の温泉地を巡回し「県下各地方の温泉に関する座談会を開いて之を紹介しその発展に資すること」として「夏の温泉座談会」(主催:鹿児島新聞社、後援:県温泉協会)の企画を発表した。実際には同年7月13日から9月8日まで、計55回にわたる連載企画として紙面に登場したが、その最初の地として垂水温泉が登場している。

「新興の垂水温泉で最初の温泉座談会 錦絵に擬ふ緑濃き江の島を背景に 涼しく白帆を眺めつつ」と題して7月13日から15日まで3日連続にわたって連載された。実際の座談会は連載の3日前、7月10日午後より開催された。当日の参加者は以下(表2)にある30名である。

表2 「夏の温泉座談会」 垂水温泉 参加者

鹿児島県関係者 (2名)	垂水町関係者 (10名)	官公署関係者 (5名)	温泉場関係者 (5名) 船会社(1名)	鹿児島新聞社 (6名), その他(1名)
山口県衛生課長 宮川技師	角野町長 川上助役 木場庶務主任 川崎勸業主任 川畑銀蔵町会議員 兼温泉調査委員 澤田町会議員兼温 泉調査委員 脇元町会議員兼温 泉調査委員 平瀬協和小学校長 黒葛原主席訓導 和田訓導	樋山垂水郵便局長 篠原海潟郵便取扱 所長 森山垂水警察署長 山崎巡查 山之内巡查	川畑直吉(江ノ島 湯) 井之上助右卫門 (協和湯) 上之原熊太郎(海 潟湯) 関屋喜次郎(江ノ 島休憩所主) 和田長吉(海潟有 志) 町田一平 (垂水丸事務取締 役)	富田重治 有村慶蔵 下福緑村 福元正 平岡隆義 高野資郎垂水支局 主任 村田豊作(医師)

8) 同上より筆者作成

記事に掲載されている座談会の過程を分析してみると、興味深い点に気づく。まず誕生したばかりの垂水温泉のベンチマークを別府温泉としている点である。湯場の時期から海淵の温泉経営に深く関わっており、昭和初期、再び自ら温泉採掘に成功していた川畑銀蔵町会議員は、鹿児島新聞社の富田重治の質問に対して、以下のように語っている。

富田氏：温泉場業者の方にお伺ひしますが、家を建築する際は他の温泉の視察でもなさいましたでせうか。

川畑（銀蔵）氏：私はまだ温泉を掘つただけで工事には掛つてゐませんが昨年十一月ごろ九州の一部の温泉を巡りその後別府も視ました。今から廿五年前に視た時の別府は垂水温泉よりも少し進んでゐる位のものでした。然るに現在では隔世の感がありますが、わが垂水も別府のやうにはなれぬにしても研究努力さへすればそれに近い程度までは発展しはしないかと思ひます。

一方で県側からは、県内温泉を県の指導で近代化・組織化していこうとする認識がみてとれる。したがって別府温泉でベンチマークしているところは、先述の川畑が言うような漠然とした将来への期待ではなく、行政がどのような「指導」をして垂水温泉を別府の方向へと導いていくのか、といった文脈が強い。

たとえば、山口衛生課長は以下のように述べている。

「自分勝手の設計によって旅館を建築し悔を後に残すやうなことがあつてはならぬ、出来るなら温泉協会に話して貰へば県営繕課に交渉し如何やうにも便宜を計る考へです。垂水は大隅半島の咽喉部に当り枢要の地でありますから地方客相手に建築せず県建築係の意見を聞くことが必要でせう。…」

「出来るなら土地の人より県外の資力ある人に経営して貰つた方がよい。県外の金持は必ず県外に宣伝する。小資本家が小温泉を続出するよりも県外の資本家に開設せしむるほうが必要である。別府では県外から地所を買ふ希望者があれば市温泉課で交渉の任に当り出来るだけ便宜を計つてゐる。然るに本県ではなるべく高く売りつけやうとする、従つて買はない、従つて小資本家が小規模で経営することになり発展を阻害する、聞き苦しいことと思ひますがなるべく県外資本家を歓迎してほしいものです。」

さらに、鹿児島新聞社や衛生課の技師からも「忌憚なく申しますと垂水温泉場の旅館はどうも昔しまゝの建築だなあといふ感じがします。旅館の構造は襖は禁物です。襖一重では隣の室から覗かれる心配があります。室と室の間は壁できちんと閉めてありたいものです」(富田氏)「どの旅館でも浴衣は大抵綺麗ですが帯が汚れてゐるから注意して欲しい、それと枕をよく考へて頂きたい」(宮川氏)といったような注文が相次いだ。

ほぼすべての温泉関連施設が新築にもかかわらず、垂水温泉の近代化・組織化への関心から様々なことを述べる鹿児島市からの訪問者に対し、垂水温泉側からはこれに対する反応が見られない。山口衛生課長の県外資本受け入れの勧めがあった後、川畑氏は「衛生課長にお尋ねしますが、もつと温泉を掘たいと思つてゐますがどんなものでせうか」と投げかけ、温泉採掘の主体が垂水町関係者の側にあるという意味を示唆している。また会の終わりのほうで、昭和期垂水温泉掘削の功労者である上之原熊太郎は「私は飛岡橋を架ける

際石の下の水が溜まってゐたので付近に温泉があるものと思ひ温泉を発掘したものでその石は湯の神様として今でも家に保存してあります」と述べ、それまでの「発展」に対する様々な話とは無関係な発言まで掲載されてある。ここに、垂水温泉をめぐる「発展」の視点について、都市的な温泉観光地を指向する発想と、「温泉場」地元が描くそれとでは、はじめからそれなりの乖離があったと判断することもできよう。

この座談会以後、垂水（海潟）温泉は鹿児島新聞を活用しながら、本格的な宣伝にうつて出た。座談会の3か月後、昭和6年10月10日（土曜日）に垂水丸がボサド棧橋（鹿児島港第二棧橋）より海潟温泉直行船の運航を開始し（料金25銭）、このわずか1週間後の10月17日に鹿児島新聞の工場員200名余りの「慰安会」を垂水海潟温泉で行っている（10月20日付に記事掲載）。小さい記事ではあるが日帰りツアーが以下のように詳報されている。

本社工場員秋季慰安会は、新嘗祭の十七日振興の垂水温泉場において開催した。この日富田営業局長をはじめ県下工場員監督工場員約二百余名は午前八時第二棧橋に集合、発動船第二垂水丸に乗り込み浪静かなる秋の錦江湾の美観を賞しつゝ九時海潟海岸に到着先づ一同記念撮影をなし富田氏より一端の注意を与へ直ちに胸襟を解いて各自思ひ思ひに入浴し温泉情緒を味はひ或ひは柑橘園を視察するもあり、一行協和校に集り裁縫室に休憩伊地知訓導外五職員の茶菓の接待を受け中食（ママ）のち富田氏の挨拶続いて海潟婦人会長篠原氏歓迎の辞あり、終つて一行は数隻の舟に分乗して翠色絢らんとする江の島にわたり雄大な風景を見つゝ宴を開き海潟婦人会及び同女会員各位より心づくしの饗応斡旋あり。本社垂水支局の寄贈になれる垂水町「見晴亭」美妓数名の余興に一段の興を添へ正三時名残りを惜んで帰途についたが船中大いに謳ひ四時過ぎ棧橋に帰着解散した。…<sup>9)</sup>

ここにあるように、夏の大座談会で厳しい意見も述べていた鹿児島新聞社の富田氏が200名以上も船で垂水温泉に入ってきたことがわかる。さらに興味深いことに、協和小学校が団体観光客の休憩所として利用されたばかりか、その対応には訓導があたっていた。団体客に対して協和小が休憩所として提供され訓導が対応する記事はほかにも見られることから、協和小は公共施設として「観光センター」機能をも担っていたということができらるだろう。

そして同年12月1日付には創刊50周年を祝う垂水町からの広告が一面を使って掲載された（図2）。この広告の半分以上が垂水温泉もしくは温泉に関係する人士からの広告であった。これは翌年の昭和7年以後毎年掲載された鹿児島新聞元日広告への垂水町市街地（本町・上町など）の店舗名とを比較しても、特異であると言える。すなわち、垂水温泉は当時の鹿児島県内一大メディアである鹿児島新聞との関係を広告を通じて強化し、「新興」垂水温泉をPRする戦略に出たと見ることができらるだろう。

9) 『鹿児島新聞』昭和6年10月20日付、7面



**祝 鹿 児 島 新 聞 創 刊 五 十 周 年 記 念**

見 晴	垂水町自動車組合 役員一同	池田基	高野助作	若松寅作	檀山亮則	伊知地徹彌	奥誓二	江藤熊男	垂水町医師團	垂水町役場 吏員一同	
永田平助			協和温泉 上之原熊太郎			江之島ラヂオ温泉 新築落成			井之上温泉 井之上助右衛門		
垂水町農會			垂水信用購買組合			垂水丸 垂水發動機船株式會社			町田自動車 事務所		
垂水町煙草耕作組合 役員一同			萬丸旅館			橋樑食堂			黒木商店		
垂水町水産組合			美波屋			永田如水			新澤金治		
梅乃家			森屋光司			平瀬榮男			垂水實科高等女學校		
倉岡眞館			錦醉食堂			上野八郎			前野自動車		

図2 鹿児島新聞創刊50周年記念の垂水町関係者による広告

(3) 昭和7年「新興垂水温泉割引券」 - 「メディア・イベント」となった垂水温泉  
 さらに、垂水温泉側による鹿児島新聞への「広告戦略」は継続された。それは昭和7  
 (1932)年4月27日より約2週間に一度の頻度で掲載されている「垂水温泉案内」という  
 広告(図3)である。「垂水温泉郷向上組合創立記念」と「向上」をわざわざ団体名とし  
 て銘打っている点、座談会に出席していた上之原熊太郎の協和温泉のほか、井之上温泉

(現・海潟荘), 江ノ島温泉など, 記事で具体的に泉質を名前付きで指摘されていた温泉が名を連ねている点などから, 「夏の大座談会」で指摘され記事となった様々な課題を意識していることが示唆される。

また, 座談会で垂水温泉は電話加入者が少ないことを指摘されていたが, 広告には江ノ島温泉はじめ「電話四六番」が多いことに気づく。少し時代は下るが昭和14(1939)年の電話番号簿によると, この電話番号は「海潟飛岡・自動車業・町田文雄」所有となっている。すなわち草創期には, 広告にある「町田自動車部」が電話を取り次ぎ, 旅館「丸萬」や「海泉閣」「美波旅館」「南谷精肉店」, そして江ノ島温泉につなぐ, いわば「ネットワーク網」で温泉場を運営していたことも見えてくる。



図3 鹿児島新聞に掲載された「垂水温泉案内」広告<sup>10)</sup>

そしてついに, 昭和7(1932)年6月19日から7月20日まで, 垂水温泉組合は垂水汽船(「垂水丸」), 鹿児島新聞社との共同主催という形で「新興垂水温泉行割引券」を発行する(図4)。この割引券は霧島や指宿に対して日本旅行協会が企画し各駅で発売したクーポン券のようなものではなく, 鹿児島新聞の6面もしくは7面に, 特に週末を中心に刷り込んであった。鹿児島新聞からこの部分を切り取り垂水丸乗船券発売所に持参すれば, 前述した鹿児島新聞工場員慰安会と同様の旅程, すなわち鹿児島港第二棧橋から垂水温泉(海潟)行き直行の汽船往復と温泉入浴券のセットで35銭にて購入できるというものであった。『鹿児島県温泉案内』によれば同時期, 同じく第二棧橋から出港していた指宿行きの汽船は船賃のみで90銭かかり(バスは1円), 海潟行き直行便は通常片道25銭となっているので, この割引券でいかに安価になるかを理解することができる。

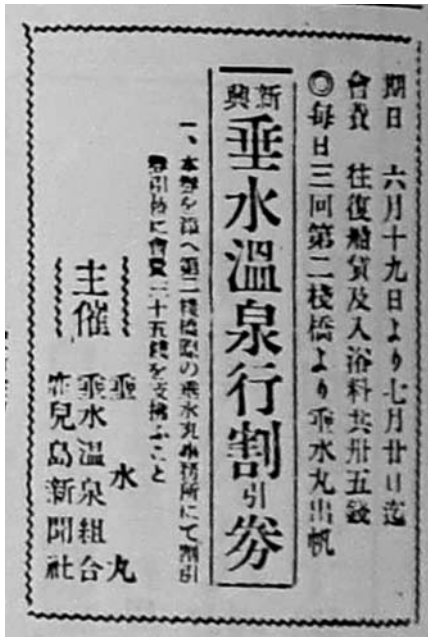


図4 「新興垂水温泉行割引券」

10) 『鹿児島新聞』昭和7年5月28日付, 3面

また、鹿児島新聞紙上では期間中、連日のように垂水温泉の「良さ」や「賑い」の様子を記事にした。

新興の垂水温泉は海上に熱帯植物帯ななる緑の江之島を浮べ江之島の向ふに桜島の秀峰を眺め温泉付近の海岸は七里ヶ浜と称し白砂青松にして風景佳く桜島は恰も富士山を小にした如く相州の海岸を思はする絶景の地である。…本社はこの好季節に当り垂水丸、垂水温泉組合主催のもとに今十九日から七月二十日まで垂水温泉行きを催すことになったから多数参加されたい。<sup>11)</sup>

また特徴的な点は、期間中の記事では垂水温泉の「サービス」について、何度も言及している点であろう。たとえば、6月26日の記事には以下のように書かれている。

垂水温泉組合では「新興垂水温泉の消長は一に今回の催しに在り」との見地からサービス満点を期する為に各温泉、旅館料亭食料品店其他一般店協議の結果、選択した新鮮材料の料理、飲食類、其他の商品を安価に提供することを申合せ早速実行したのでこれ迄世間に伝へられつつあつた垂水温泉は高い声は実際において全然蹴飛ばされて仕舞つた、恐らく行つてみてビックリするほど安い。<sup>12)</sup>

…一日の静遊を終へて帰る客の話をきくと海湯温泉場は聞いたとは反対で第一物価の安いこと、旅館料理屋の勉強することには驚いたとのことである。かくの如き評を受くのも近ごろ生れた垂水温泉郷向上組合の良き調和の取れたる指導によることでこの有様で進んだら第二の別府たる日も遠いことではあるまい。<sup>13)</sup>

このように「夏の大会談会」から翌年の「新興垂水温泉行割引券」に至る昭和6年から7年にかけての鹿児島新聞社による「メディア・イベント」を通して、「新興」と「向上」、そして「安価」をブランドとする草創期垂水温泉のイメージが形成され、宣伝されていったのである。

「新興垂水温泉行割引券」は期間終了後も利用が延長され、結局8月末日まで利用することができた。この後、垂水温泉に関する広告とのタイアップ型記事は姿を消すが、宣伝による垂水温泉の「新興」「向上」「安価」ブランドイメージは、別の鹿児島新聞記事でもしばしば継続して利用されていく。たとえば、特集写真記事の連載「涼味万斛の鹿児島湾一巡り」で、「西に指宿、東に垂水 断然光る明媚の寶島」という名で以下のように書かれている。

…温泉俄然わが西に指宿、東に垂水あり今や鹿児島湾に両方対峙して不景気ものかは浴客集客双方に火花を散らすといつたが、新興垂水温泉が江之島を看板に天下に呼びかくる近代的宣伝戦には流石の指宿もタジタジの様とある指宿の温泉業者よ！<sup>14)</sup>...

11) 『鹿児島新聞』昭和7年6月19日付、7面

12) 『鹿児島新聞』昭和7年6月26日付、6面

13) 『鹿児島新聞』昭和7年6月28日付、6面

14) 『鹿児島新聞』昭和7年7月19日付、6面

このようにして、広告によるメディア（鹿児島新聞）との接近を図りながら、「メディア・イベント」を通して垂水温泉は自らの知名度を一気に高めることに成功し、現地元の「言い伝え」となっている「指宿と並び称される温泉」という「言説」を獲得していったのである。

### 3. 垂水（海潟）温泉における「温泉観光地」化の背景と構造

これほど短期間にメディアを活用したブランド・イメージと知名度の向上がなぜ可能であったのだろうか。それを理解するには、この地域特有の「ネットワーク構造」に注目する必要があるだろう。垂水（海潟）温泉の草創期に関与した人物を見ていくと、3つに分類できる。それは海潟飛岡など海潟・中俣といった温泉場地元有志、本町を中心とした市街地の実業家、そして県外（熊本）からの人、である。とりわけ重要なのは、本町の実業家の存在であろう。たとえば、先述の川畑銀蔵は近世以後、垂水島津家の御用商人であり豪商でもあった川畑家の系譜をもち<sup>15)</sup>、広告には本町の永田旅館の支店として「旅館永田屋」、新聞記事上に登場する「十五郎そば」「垂水牛肉」など、本町、すなわち垂水の中心商店街に関連した人々が「新興」の海潟温泉街形成に参画している。県外や鹿児島市内をはじめとする大きな資本ではなく、あくまでも地元の人的・物的資源を中心として新興地域のまちづくりが展開されていた点は見逃せない。さらには、鹿児島市内と海潟との直航便を実現させた垂水発動船株式会社は、垂水島津家家老町田家の嫡子町田一平<sup>16)</sup>や側医師を勤めた桑波田家<sup>17)</sup>の桑波田嘉吉など、近世垂水麓（武家町）に居住する有力者が取締役として名を連ねている。こうした近世期垂水島津家の時代で形成された「麓」-「浦町」のネットワークの延長上にある人物どうしが新たなネットワークを形成し、地元の有志らと結束する形で、「新興」の温泉場形成に深く関与していた。ここに小さな街がもつ経路依存的（path dependency）構造を見出すこともできる。これらのネットワーク的地域組織が「上からの」輸送システムである鉄道とは異なる、「船」というオルタナティブな手段を用い、「メディア・イベント」を介した広報戦略と組み合わせつつ、一定の利益相互享受の関係を保ちながら「温泉観光地」となっていたと考えることができる（図5）。

15) 川畑家は中世に垂水を治めていた伊地知重興の家臣であったが、島津以久（のちの初代佐土原藩主）が垂水を領有し、伊地知氏が去った後は商人として定住した。川畑家は近世期、垂水領内の商業の大締であっただけでなく、天明7（1787）年の飢餓や桜島の災害等では救恤金を出して領主に献上している。これにより領主が四代目川畑清右衛門を足輕格に列し士分となる（垂水市史編集委員会，1974，p.228～229）など、経済力を背景に島津氏との関係を深めていった。

16) 町田家は初代垂水島津家領主島津以久の家老職として垂水に移住してきた。町田家・川上家系図によれば、享保7（1722）に定められた領内の家格において、垂水三家（町田・町田（中馬場）・川上）の筆頭とされている。（垂水市史編集委員会，1974，p.192～193）

17) 垂水の桑波田家は桑波田景朝の次男が分家して興り嘉吉はその7代目にあたる。2代景明以後代々医師で、3代景昌は垂水領の側医師・納戸奉行格・近習役格であった（川崎大十，2000，p.278）

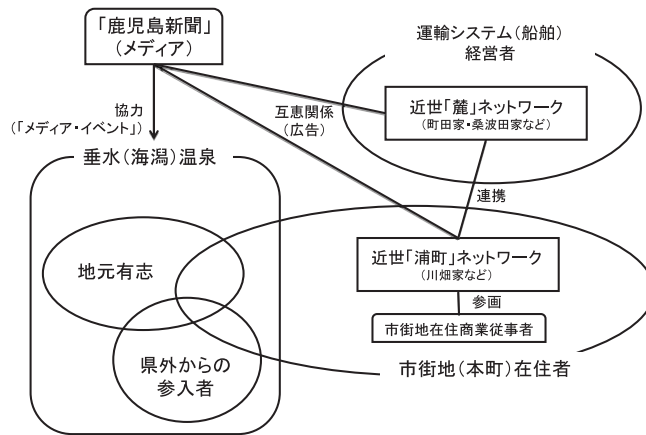


図5 垂水(海潟)温泉の「温泉観光地」化の構造

参考文献

鹿児島県温泉協会 (1929) 『鹿児島県温泉案内』  
 鹿児島県温泉協会 (1933) 『鹿児島県温泉案内』  
 鹿児島県警察部衛生課 (1939) 『鹿児島県温泉誌』  
 鹿児島商工会議所編 (1933) 『鹿児島商工会議所主催国産振興博覧会誌』  
 鹿児島商工会議所 (1943) 『鹿児島商工会議所五十年史』  
 川崎大 (2000) 『さつまの姓氏』 高城書房  
 ジャパン・ツーリスト・ビューロー編 (1928) 『旅程と費用概算 (昭和3年版)』  
 ジャパン・ツーリスト・ビューロー編 (1930) 『旅程と費用概算 (昭和5年版)』  
 ジャパン・ツーリスト・ビューロー編 (1934) 『旅程と費用概算 (昭和9年版)』, 博文館  
 砂本文彦 (1998) 『『国際観光委員会』の組織と都市施設整備課題 - 国際観光政策に伴う都市施設整備に関する研究 その1 -』 日本建築学会 『日本建築学会計画系論文集』, 第503号, pp.187-194  
 関戸明子 (2007) 『近代ツーリズムと温泉』 ナカニシヤ出版  
 垂水市史編集委員会 (1974) 『垂水市史 (上巻)』  
 垂水市史協和小学校創立百周年記念実行委員会 (1978) 『協和小学校創立百周年記念誌』  
 垂水村役場 (1922) 『垂水村勢要覧』 (鹿児島県立図書館所蔵)  
 長尾隼 (2011) 『ナショナルな風景をめぐる: 国立公園選定過程における風景観の交錯』  
 『関西学院大学先端社会研究所紀要』 第6号, 2011年, pp.33-55  
 中島信夫 (2004) 『ふるさとの歴史 (垂水市協和編)』  
 村串仁三郎 (2005) 『国立公園成立史の研究』 法政大学出版局